
バカと天才？たちと召喚獣

SHIN.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと天才？たちと召喚獣

【Nコード】

N1068Z

【作者名】

SHIN・

【あらすじ】

科学とオカルトと偶然によって開発された「試験召喚システム」を試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こした文月学園。そこに二年の振り分け試験直前に転校してきた7人の天才？とFクラスのバカたちとAクラスの優等生たちが繰り広げる学園物語です。この作品が処女作ですので駄文+亀更新になるかもしれませんがそれでもよければ読んでください。

プロローグ（前書き）

はじめまして、SHIN・と申します。

文才もなく、駄文になるかもしれませんが、よろしく願います。

プロローグ

振り分け試験日

明久side

時刻8時55分

「おはよーございます鉄・・・西村先生！」

鉄人「吉井、遅刻・・・なぜそんなにボロボロなんだ？」

「いやーくる途中にチンピラに絡まれてる女の子を助けてたら遅れちゃって」

鉄人「くだらん冗談はいいから早く服を着替えて試験会場に行け（まったくこのバカは・・・）」

「はい！」

僕は校門前で鉄人に挨拶してから、更衣室で体操服に着替えてから試験会場へ向かった。

「おはよー雄二」

雄二「ん？遅かったなバカ久」

明久「来て早々人を罵倒しないでよ！僕はバカじゃないし！雄二も大差ないじゃないか！」

康太「・・・振り分け試験の日に遅刻する奴なんてバカしかいない」

島田「仕方ないないわよ、吉井はバカなんだし」

「みんな酷い！これにはひじょーに深い訳が・・・」

秀吉「まさか振り分け試験のときに遅刻とはもう・・・」

「だからちがうってば！」

雄二「なら何故遅刻したんだ？」

「それには深〜い事情があつて・・・」

雄二・秀吉・康太・島田「「「（・・・）寝坊（だな！）（じゃ

な！）（ね！）」「」」

「待って！まだ何もいつてないよね！？」

大島先生「次の教科の試験始めるから全員席に着けよー」

振り分け試験終了後

「これならCクラスくらいいけたんじゃないかな？」

雄二「安心しろ明久、お前はFクラスで確定だ」

「なんだと！10問に1問は書けたはずだからDにはいつてるはずさ！」

4人（（（やっぱり吉井はバカだな）））

明久「みんなどうして僕をあわれむような目でみるの？」

明久side out

優璃side

優璃家にて

時刻20時30分

「ハア・・・（今日の朝、変な人たちに絡まれていた私を助けてくれた人・・・たしか文月学園の制服着てたよね？ならまた会えるかな？）」

葵「どうかしたの？優璃」

「ううん、なんでもないよ！」

葵「それならいいけど」

「それより葵、振り分け試験受けなくてよかったの？」

葵「いいのいいの、私は演劇ができればどのクラスだっていいし、

麗奈も心配だしね」

葵は笑顔でそう答えた。

麗奈「・・・ごめんなさい」

葵「麗奈が謝ることはないでしょ」

「そうだよ」

麗奈「・・・でも」

葵「気にしないの、それに和くんもFクラスだから」

「え？和くんはAクラスのボーダー越えてたはずだけど・・・」

麗奈「・・・和くん寝坊したんだって」

「なにやってるの和くん・・・」

葵「まさか振り分け試験の日に寝坊するとは・・・」

ピンポン

「誰かな？」

葵「ちよつといってくるね」

和哉「お邪魔しまゝす」

葵「噂をすれば・・・だね」

和哉「???」

「寝坊くん、どうしたの？」

和哉「うつ!?!どうしてそれを」

「葵から聞いた」

和哉「葵さん!どうしてしってるんですか、今日試験受けてないでしょ!?!」

葵「学園にいる知り合いに聞いたんだよ、小学生が振り分け試験に遅れてきたって」

和哉「小学生じゃない!」

「試験の前の日に夜更かしして寝坊するくらいだから説得力ないけどね」

和哉「・・・(シクシク)」

麗奈「・・・ところで優璃は大丈夫なの？」

「私は多分問題ないとおもうけど」

麗奈「・・・優璃とも一緒のクラスがよかった」

「来年は同じクラスになれると思うよ、麗奈も頑張ってるし」

麗奈「・・・来年はみんなでAクラス」

葵「そういえば、宗ちゃんと薫ちゃんと蓮くんは？」

麗奈「・・・薫は問題ないって言ってた」

「宗ちゃんと蓮くんは特例で別の日に振り分け試験受けたらしいよ」

麗奈「・・・あの3人はAクラス確定のはず」

葵「そうだね」

「そういえば次の登校日っていつだっけ？」

葵「たしか始業式の日だよ」

「そうだったね、はやく学園に行きたいんだけどね（あの人に早く会いたいし）」

葵「そうだね。さてと、それじゃあ麗奈の日本語の勉強でも手伝うよ」

麗奈「・・・ありがとう」

「和くん・・・いつまで泣いてるの・・・」

和哉「・・・僕は小学生じゃない・・・（シクシク）」

優璃 side out

第1話 & l t ; 転校生たちと自己紹介 & g t ;

明久 s i d e

鉄人「遅いぞ！吉井！」

「おはようございます西村先生！」

鉄人「吉井・・・おはようございますじゃないだろう」

「え？ えーつと・・・今日も肌が黒いうえに暑苦しいですね？」

鉄人「お前は遅刻の謝罪より、俺を罵倒する事と肌の色の方が大事なのか？・・・まあ良い、受け取れ」

「掲示板とかに張り出したほうが楽じゃないですか？」

鉄人「まあそれもそうなんだがな、ウチは試験校として有名だから色々問題があるんだ」

「へえ、さて何クラスかなつと（きつとDくらいは・・・）」

もらった封筒の端を破き、中に入っていた紙をみると。

『吉井 明久・・・Fクラス』

二年Fクラスの前。吉井明久は躊躇していた。

「遅刻なんてして、みんなの印象悪くなってるのかな・・・？」

「なんて考えすぎだよね！」

軽快に扉を開けて入った。

「すいません。ちょっと遅れちゃいました」

雄二「早く座れこのウジ虫野郎！」

（・・・へ？）

雄二「聞こえなかったのか？ああ？」

（それにしてもなんて物言いだろ。いくら教師でも失礼すぎる。）
僕はにらみつけるように教壇に立っている教師を見た。

「・・・雄二、何やってんの？」

教壇にいたのは明久の悪友、坂本雄二だった。

雄二「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がってみた、なんか転校生がこのクラスに来るらしいぞ」

明久「そうなんだ」

F「「「「なにー！？」転校生だとおおお！？」」「」」」

F「男か！？女か！？」

雄二「男子1人、女子2人らしいぞ」

F「「女子がくるぞー！！」」「」

F「「「うおおおお！！」」「」」

「で、何で雄二が先生の代わりを？」

雄二「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

雄二「ああ、そうだ」

（雄二さえ説得すればこのクラスは僕の思いどおりに・・・）

雄二「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

（考えることは、同じなんだな）

「それにしてもさすがはFクラス。ひどい設備だね」

Fクラスの面々はみんな床に座っている。椅子なんてものはないらしい。

福原先生「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貧相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

このクラスの担任だ。

福原先生「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

僕と雄二がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待ってから壇上でゆっくりと口を開いた。

福原先生「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしく願います。」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。
チョークすらまともにないみたいだな。

福原先生「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」

F「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

福原先生「我慢してください」

F「せんせー、卓袱台の足が折れました」

福原先生「ボンドで直してください」

F「せんせー、窓が割れてて隙間風が寒いです」

福原先生「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」

(・・・ひどすぎる)

福原先生「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、転校生からやってもらいましょう。一ノ瀬君、川崎さん、水無月さん、入ってきてください」

福原先生がそう言うのと、転校生の3人(小学生の男の娘と長い黒髪を後ろで束ねている女の子とセミロングの金髪の女の子)がFクラスに入ってきた。

福原先生「まず、一ノ瀬君。軽く自己紹介してください。」

和哉「えっと、一ノ瀬 和哉といいます。趣味は絵を描くことです。一年間よろしくお願いします」

F「どこからどうみても小がk・・・ひっ!？」

(な・・・なんだこの殺気は!?)

和哉「僕は小学生じゃないですので間違えない様をお願いします(ゴゴゴゴ・・・)」

一ノ瀬君は黒いオーラを出しながらF生徒にそう言い放った。

福原先生「つつ次は、川崎さん。自己紹介を。」

葵「川崎 葵です。部活は演劇部に所属する予定です。一年間よろしくお願いします。」

長い黒髪を後ろで束ねている子がそう言った。

秀吉「葵殿ではないか!？どうしてここにいるのじゃ?」

「秀吉の知り合い?」

秀吉「まあ、そんなところじゃ」

葵「あ、秀吉君もFクラスなんだ？」

秀吉「うむ。しかし葵殿はAクラス確実の成績だったはずじゃが？」

葵「麗奈が心配だったから。振り分け試験受けなかったんだよ。」

福原先生「え、雑談は後にしてください。」

葵「あ、すみません」

福原先生「水無月さん、自己紹介を」

麗奈「・・・はい。・・・水無月 麗奈です。・・・よろし

くお願いします。」

と、綺麗な金髪の女の子が言った。

F「質問いーですかー？」

麗奈「・・・はい」

F「親が外国人なんですか？」

麗奈「・・・母がイギリス人」

葵「ちなみに最近までイギリスにいたから、少し日本語が苦手だから話すときはゆっくり話してあげてね」

（帰国子女か・・・島田さんと同じで大変なんだろうなあ・・・）

福原先生「次は、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

秀吉「木下 秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

（秀吉、今日もかわいいなあ）

秀吉「よく間違われるが僕は女子ではなく男子じゃ・・・」

和哉（木下君も苦労してるんだね・・・）

康太「・・・土屋 康太・・・特技は盗みじゃなくて盗み・・・特にない」

和哉（・・・聞かなかったことにしよう）

島田「島田 美波です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。趣味は吉井 明久を殴ることです」

明久「誰だ！そんなピンポイントで危険な趣味を持つてる子は！？」

和哉・葵（あの子とはあまり関わらないほうが良さそう）

あとは名前をいうだけというのが続き、明久の順番までまわってきた。

「コホン。え〜っと、吉井 明久です。気軽に『ダーリン』と読んでくださいね」

F「……ダーリンイイ……！……！……」

（凄い威力だ……吐き気が止まらない）

「……失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

僕が自己紹介を終えると……

姫路「あの、遅れて、すみま、せん……」

F×4「え？」

福原先生「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願ひします」

姫路「は、はい！ あの、姫路 瑞希と言います。よろしく願ひします！」

F「はいっ！ 質問です！」

姫路「あ、はいっ。なんですか？」

F「どうしてここにいますか？」

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまっています……」

F「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

F「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

F「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

F「黙れ1人っ子」

F「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F「今年一番の大嘘をありがとう」

（僕以外にもみんなバカばっかじゃないか……）

姫路「で、ではっ、今年1年よろしく願ひします！」

姫路は逃げるように、僕と雄二の間の空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしまふ。

「姫路さん、体調はもう大丈夫なの？」

姫路「あ、吉井君。だいぶ良くなりましたよ。」

「そっか、よかった」

福原先生「はいはい。静かに・・・」

バンバン！！・・・バキッ！

教卓が木っ端微塵になった。

（さすがに酷すぎるよ）

福原先生「えゝ。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていてくださいね」

「・・・ねえ雄二、ちよつと良い？」

雄二「ん？なんだ？」

和哉（おもしろそうだから、盗み聞きしようかな）

雄二を伴い廊下に出た。

姫路「吉井君、どうしたんでしょうか？」

葵「姫路さん、吉井君が気になるの？」

姫路「え？、えつと」

葵「川崎　葵です。姫路さん、よろしくね。」

麗奈「・・・水無月　麗奈」

姫路「こ、こちらこそよろしくお願いします」

廊下にて。

「ねえ雄二、試召戦争を仕掛けてみない？」

雄二「この前学校の設備なんざどうでもいいってなかったか？・・・姫路のためか？」

「ち、違うよ！？」

雄二「素直じゃねえな。まあどうせ、試召戦争はやるつもりだった。世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくてな」

和哉（新学期初日から仕掛けるのか・・・ま、とりあえずはＦクラ
ス代表の手腕をみせてもらいますか）

雄二「先生が戻ってきたみたいだし、戻るぞ」

再び教室にて。

福原先生「えーと、坂本君キミが最後ですよ。クラス代表でしたよね？前に出てきてください」

雄二「了解、Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

雄二「コホン。さて、皆に一つ聞きたい。・・・Aクラスは超豪華待遇らしいが・・・不満はないか？」

F×41「大アリじゃあッ！」

雄二「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ！」

F「いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！」

F「Aクラスだって同じ学費だろ！？」

F「改善を要求する！！」

雄二「そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

第2話 & 1 t ; D クラスに宣戦布告へ & g t ;

雄二「そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う!」

F「そんなの勝てるわけがないだろ?」

F「これ以上設備が落ちたらどうなるんだ」

F「姫路さんがいたら何もいらない!」

F「麗奈さんがいるだけで僕は満足です!」

雄二「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

F「無理に決まってやるじゃん」

F「そう言われても何の根拠もないしなあ・・・」

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は自信ありげにそう宣言した。

雄二「おい康太、いつまで姫路と川崎、水無月のスカートを覗いてるんだ」

3人「・・・えっ!?!」

3人は素早くスカートを押さえた。

雄二「土屋 康太 こいつがあ有名な寡黙なる性職者だ」
そういうと康太は首を横に振った。

F「馬鹿な・・・奴がそうだというのか?」

F「見る! まだ証拠を隠そうとしているぞ・・・」

F「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

雄二「それに姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

姫路「え? 私ですか?」

(姫路さんは学年トップ5に入っているほどの学力だからね)

雄二「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

F「そうだ! 俺達には姫路さんがいる!」

F「彼女ならAクラスにも引けをとらない！」

雄二「それに木下 秀吉だっている」

秀吉「ワシもか？」

F「演劇部のホープ！」

F「確かAクラスに木下 優子っていう姉がいただろ」

雄二「そのほかにも島田もいる」

島田「えっウチ？」

雄二「島田は数学だけならAクラスにも匹敵する。当然俺も全力を尽くす」

F「坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ」

F「確かになんかやれそうな気がしてきたぞ」

F「これはいけるんじゃないか!？」

F「よし! やってやるうじゃねーか!！」

教室の士気が高まっていったが・・・

雄二「それに吉井 明久だっている」

シーン・・・

F「誰だよその吉井 明久って」

「雄二。何でそこで僕の名前をだすのさ!？せつかく上がった士気が台無しじゃないか！」

雄二「そうか、知らないのなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ!！」

F「確か観察処分者って『馬鹿の代名詞』じゃなかったっけ？」

「ちつ違っよ!！ちよっとお茶目な16歳の愛称で・・・」

雄二「そうだ『馬鹿の代名詞』だ」

「肯定するなバカ雄二!！」

姫路「あのそれってどういうものなんですか？」

雄二「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。

力仕事とかの雑用を特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ」

姫路「それって凄いですね! 試験召喚獣って見た目と違って力持ち

らしいですし」

姫路さんが僕に期待の眼差しを向けている。

「あはは。そんな大したものじゃないよ。確かに僕なんかの点数でも召喚獣の力はかなり強いけど、その時受ける召喚獣の負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ。皆と同じで教師の監視下しか呼び出せないし、僕にメリットもないしね」

F「おいおい・・・じゃあ召喚獣がやられたら本人も苦しいって事だろ？」

F「だよな・・・それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事じゃん」

雄二「気にするな！明久はいてもいなくても大して変わらん雑魚だ」

「・・・雄二そこは僕をフォローするところだよな」

葵「坂本君、さすがに酷すぎない？」

「川崎さん・・・」

葵「葵でいいですよ」

「葵さん・・・ありがとう」

雄二「まずは俺達の力の証明としてまずDクラスを制圧しようと思う。皆この境遇に大いに不満だろう？」

F「・・・当然だ！」「」

雄二「なら全員筆を執れ！！出陣の準備だ！」

F「」「」「おぉー！」「！」「」「」

姫路「おッおー／／／」

姫路さんも恥ずかしげに手をあげていた。

雄二「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう」

「ねえ雄二今字が間違ってた？それに下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

雄二「大丈夫だ。騙されたと思って行つて来い」

和哉「一緒に行こうか？」

麗奈「・・・私も」

「えっ？一ノ瀬君に水無月さん、いいの？」

和哉「和哉でいいですよ」

麗奈「・・・麗奈でいい」

「ならこつちも明久でいいよ。それじゃあ行こうか、和哉君に麗奈ちゃん」

和哉・麗奈「（・・・）はい」

こうして3人でDクラスに向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1068z/>

バカと天才？たちと召喚獣

2011年12月5日22時47分発行